

【論文】

相互行為としての「笑い」

— 自・他の領域に注目して —

早川 治子

Classification of Laughter as Social Interaction

Haruko Hayakawa

本稿は「笑い」を自・他の領域を仮定することにより、その対人相互行為上の機能をA仲間づくりの「笑い」、Bバランスの「笑い」、C覆い隠す「笑い」の3種に分類した。その自・他の領域への出入りと「笑い」が付加される発話内容の視点からA、B、C3種はそれぞれAは3種、Bも3種、Cは2種に下位区分される。

「笑い」は基本的に自己開示により、自己の領域にあるものが境界を抜けて、他者の領域へ入り込む時に生じるものだと考えられる。「笑い」によって人は仲間であることを確認する。または仲間であることを装い、協調的に物事を進めると考えられる。

キーワード: 笑い、領域、境界、自己開示、協調

1 はじめに

1.1 本稿の目的

現在まで「笑い」の研究とされるものは多く、アリストテレスの優越説、ショーペンハウエルの不適合説、フロイトのエネルギー放出説と諸説あるが、「笑い」を自己と他の対応において、そのコミュニケーション機能に焦点を当てて分析したものは少ない。

本稿は、早川（1994）（1997）（1997）（1999）に基づくものであり、対人相互行為において協調機能を担う「笑い」を自・他の領域に注目して分

析することを主眼としている。分析対象としては自然談話データを扱い、それを観察して得られた知見を基としている。1において本稿で扱う「笑い」の概要と形態を説明し、2において自・他の相互行為としての「笑い」の機能について自分の領域と他の領域への出入りの視点から分析、分類する。

1. 2「笑い」の範囲

「なぜ笑うのか」という問いに対する答えとして一般的なものは「おかしいから」というものであろう。しかし、人はおかしくなくても笑う。

<例 1 >

- 1 A あー、そうですか。<笑いながら>ありがとうございます。はい。^(注 1)

1において、何が笑われる対象なのであろうか。この「笑い」に笑われる対象を見つけることは困難である。また人はなぜ「ごめんなさい。ごめんなさい。」と謝りながら、笑うのであろうか。そこにあるのは「笑い」によって相手とのコミュニケーションを協調的に動かしたいという発話者の意図である。例 2 は録音開始場面で笑っている例である。

<例 2 >

- 1 A えー、あの。
-2 B はい。
-3 A 特に、なにも。
-4 B <笑い>
-5 A すいません。
-6 B 我々のことがチェックされるわけですか。
-7 A いえいえ。

もしここに例 3（作例）のように笑いがなかったらどうであらうか。

<例 3 >

- 1 A えー、あの。

- 2 B はい。
- 3 A 特に、なにも。
- 4 B <沈黙>
- 5 A すいません。
- 6 B 我々のことがチェックされるわけですか。
- 7 A いえいえ。

例3のように「笑い」のかわりに沈黙が起こった場合は発話者は、緊張して「笑い」どころではない、または気分を害してコミュニケーションのチャンネルを切ろうとしていると考えられる。

今回はこのような対人相互行為上の機能を持つ「笑い」を分析対象として扱う。つまりユーモアの質といった観点では云々せずに、対人関係上の問題として扱う。

1.3 データ

自然談話を録音し、データ処理したものを分析対象とした。これは「現代日本語研究会」が収集し、文字化したデータである。19人の協力者がテープレコーダーを携帯し、各々の職場の朝、雑談、会議を1時間ずつ録音したもののうち、それぞれ10分ずつを採録したものである。このテープと協力者が記入したフェイスシートをもとに、談話資料が作成され、フロッピーディスクとして、現代日本語研究会編「女性のことば・職場編」に添付されている。この資料の中で「笑い」は数件の例外を除き、すべて<笑い>として一括して処理され、例えば「あはは」、「おほほ」といった音声的特徴、及び長さは表記されていない。^(注2)

2.1 「笑い」の分類

本稿では自己の領域というものを仮定して「笑い」の分類を試みている。自己の領域とはバリアで囲まれた自己の内的世界であり、感情、感覚、プライバシーが内在するところである。同時にそこは自己のテリトリーであ

り、自己の裁量により物事の決定がなされるところである。

また本稿の分類において「笑い」を基本的に実質的意味情報内容を持たず、実質的発話に付加されることにより、様々な対人関係調節の機能を発揮するものと捉えている。

以下個々の「笑い」を分析する。

A: 仲間づくりの「笑い」= 談話促進の「笑い」

この種の「笑い」は親しい人々の間で頻繁に出現するものであり、まず A-1 の「笑い」で会話参加者のうち、新情報の提供者、働きかける側が自分の領域にある楽しいと思っていることを提供し、相手が自分の楽しさを共に享受することを期待しながら笑う。それに対し、相手、つまり情報の受け手が情報の提供者の領域にある楽しいことに A-2 の「笑い」で共有表明をしつつ笑う。または両者が A-3 の「笑い」で共通認識に基づき、同時に笑う。このようにして場面が盛り上がり、相互の親しさが緊密になるとともに、互いの仲間意識も緊密になり、最終的には両者は同一領域内にいることになる。

A-1: 自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す「笑い」= 話題の共有期待の「笑い」

自分の楽しいと思うことを談話場面に提供し、相手にもその話題を共有してほしい時、「笑い」を発話に付加する。会話例 4 は昼休みにドーナツをもらって皆が喜んでいる場面である。「笑い」によって場がどんどん盛り上がっている。会話例 5、会話例 6 も新情報の提供者であり、話題の導入者 A が「笑い」によって場面を盛り上げている。話題の共同参加者 B に自己の領域にある楽しさを共有することを期待している。

会話例 5 において A は自分の子どもとその保育園の先生のいい関係について述べている。会話例 6 において A は航空会社のマイレージ特典について自分の知っていること、得なことを開陳している。両者とも「笑い」に

相互行為としての「笑い」－自・他の領域に注目して－

よってAはBを自己の領域に招き入れると同時にその楽しさを共有し、会話を協調的に展開し、より親しい関係にしている。

_____部分がA-1の「笑い」である。_____が後に説明するA-2の共有表明の「笑い」であり、_____がA-3の共通認識に基づく「笑い」である。

<例4>

- 1 A あ、こんないっぱい入ってるー。
ふー、ひょー、★ほっほー。<笑い>^(注3)
- 2 B →これはね←、なんだっけ。
- 3 C なんとか★ハニー。
- 4 A →わっ、←すごーいー★、すごーい！
- 5 D →うん。←
- 6 A すごい、なんだっけそれ。すごいいいしいやつ。あっ、7つも入ってる。
- 7 D すごーい。
- 8 A どーしよ。<笑い>
- 9 D あっ、すごーい。 やっぱ、Xさんより趣味はいいな。
- 10 E ね。
- 11 複数話者 <笑い・複>^(注4)

<例5>

- 1 A <笑い>もうホントにいい先生がいるのよねえ。
- 2 B ふーん。
- 3 A それで、もう、うちの子供なんか、恋をしてる程大好きで、「だいしゅき、だいしゅき」とかゆっ<笑い>
- 4 B <笑い>かわいいー。<笑い>

<例6>

- 1 A はいっ、入るだけで5000マイル信じられる↑

- 2 B わ、ずーい、うそ。
- 3 A でしょ。↑
- 4 B ずるーい、ずるーいずるーい。
- 5 A ずるいでしょ。<笑い>
- 6 C <笑い>
- 7 B ずるーい、そんなのー。
- 8 C <笑い>
- 9 B しらない、ちょっと待って。
- 10 A <笑いながら>それでね、★聞いて聞いて。
- 11 B →そんな。←
- 12 A <笑いながら>それで、12 月 15 んちまでに、旅行
すると、さらにボーナスマイル 5000。
- 13 B えーっ、★ずるーい。
- 14 A →それでね。←それでね、西海岸往復で★もう 2 万で
しょ。
- 15 D →えー、ずるーい。←
- 16 C <笑い>
- 17 B ずるーい。
- 18 A ずるいでしょ。
- 19 B でもあれって、★タイミングなんだよね。
- 20 D →1 回退会してさー、←入るってゆうのは、
だめ。<笑い>
- 21 A <笑いながら>だめだな。
- 22 E <笑い>
- 23 A だめだ、今までのがパーに★なっちゃう。
- 24 B →うん。←でも、そう、うん、そうそうそう。
- 25 複数話者 <笑い・複>

A-1の「笑い」は常に発話の後に付加されるわけではなく、5-1、6-10、6-12のように発話の前、または発話に〈笑いながら〉という形で、上乘せされ、相手を話題に注目させ、相手の反応を呼び込むと考えられる。7-2の例にはよりそれが顕著である。

<例7> (職員室に持ってきた花の名前を尋ねられて)

- 1 A なんの花なの？
- 2 B これねー、(間) ウフ、待って。<笑いながら>
あかめやなぎ。
- 3 A あかめやなぎ？
- 4 B ええ。

話者Bは笑うことによって聞き手を「あかめやなぎ」という話題に引き込み、それに対して相手が反応してくれることを期待している様子が観察される。

この種の「笑い」に対して 相手はもたらされる情報内容を知らないために「笑い」で応じることはできないが発話者の次の情報提供に期待し注目することが要求される。それにより発話者はこれからの話題の仲間に相手を相手を誘い込み、談話を展開していく。自己の領域に相手を引き込む「笑い」である。

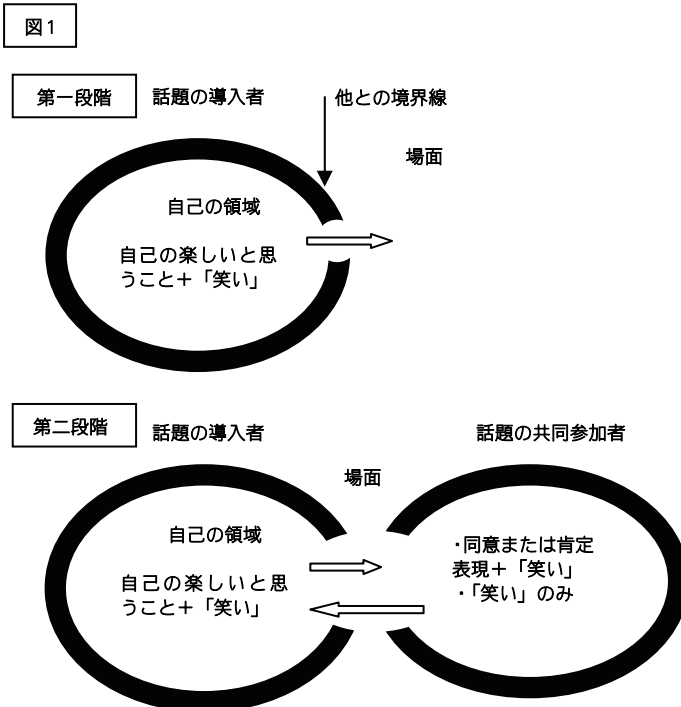
A-2:相手の考えを共有し、会話に参加する「笑い」=共有表明の「笑い」

「笑い」によって相手に対する話題の共有を表し、談話を協調方向に持っていくことがある。会話例3ではAが自分を楽しんでいる新情報を提示し、Bがそれにあいづち、または「かわいいー」と感嘆を表す形容詞+〈笑い〉で応答している。Aは〈笑い〉によって仲間内の話題の共有を期待し、Bはその期待に応じている。

このどちらの「笑い」も場の雰囲気：仲間であることの確認にプラス方向に寄与している。「笑い」を削除した場合、場面の雰囲気が緊張すること

はない。つまり、もともと協調的な内容の発話に付加されるものであるが、「笑い」により、いっそう協調的な雰囲気が促進されている。

A-1の「笑い」とA-2の「笑い」は5-3と5-4、6-5と6-6、6-21と6-22のように、隣接ペアとして表れることが多い。話題の導入者は新情報をA-1の「笑い」とともに提出し、話題の共同参加者は同意または感嘆を表す表現（かわいい、ほんとう、すごーい、そうそう等）とともにA-2の「笑い」を出すことが多く観察された。つまり隣接ペアの第一発話段階においてA-1の「笑い」が出、第2発話段階においてA-2の「笑い」が出る。このような隣接ペアが繰り返されることにより、両者間の境界、いわゆる「隔て」がなくなり、両者は自分たちが同一の領域を共有していることを自覚し、仲間意識が緊密になると考えられる。その相互関係と談話の展開状況を図1に示す。



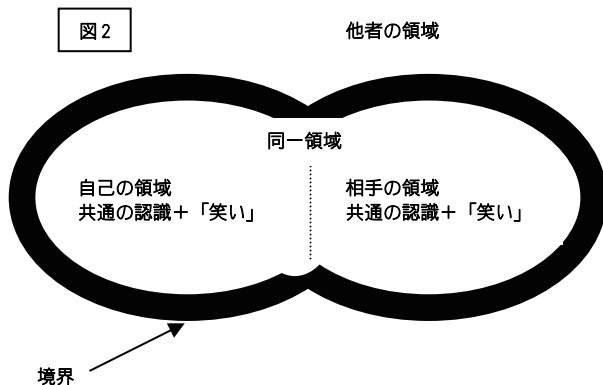
A-3: 共通の背景を確認する「笑い」= 共通認識確認の「笑い」

A-1, A-2 のペアが繰り返され、共通の領域が確認されると両者が同時に笑うことが観察される。会話例 4-12, 会話例 6-25 の「笑い」である。しかし前提条件としてペア発話がない場合でも、互いに共通理解があれば両者が同時に笑うこともあり、また 1 方が共通理解を示唆して笑うこともある。これが A-3 の「笑い」である。

<例 8>

- 1 A でも、わたしなんか、なんか、あの、よくあるじゃないですか。お見合いの時に聞かれる、あれのような心境になって。<笑い>
- 2 B 興信所みたいな。<笑い>
- 3 A <笑いながら>なんか、よく、ほら、わたしもそういう年になってきたのかなと思っちゃって<笑い>

A が「あれのような」と互いに既知である情報を示唆し、互いの共通理解に基づく同意の期待を示すことにより、B は A の発話を補足するような発話と「笑い」で応じて談話が進行している。この種の「笑い」には話し手と聞き手の話題の背景であるバックグラウンドが共有されている。それだけでなく、それを「笑い」で確認することにより参加者二人の一体化が促進され、世界を二人で共有することにより仲間意識を高め、その結果、反対に仲間以外の世界にと閉じていくものもある。わかっているものだけに通じる「笑い」である。図 2 にその状況を図示した。



会話例 9 にもこの「笑い」の特徴が表れている。

<例 9 >

- 1 A 今出まーすつつって。
- 2 B 今出るって。
- 3 A/B そば屋の出前<笑い>
- 4 B 知ってる？(Cに向かって) 何でもね、今、今やりますとかね、今、行っ、行っただかしですとかね。そういうふうにな、嘘つくっていかね、そういういいわけするのをね、そば屋の出前っていうの。日本語で。

会話例 9 では、A、B が出前の遅いそば屋に電話して、その返事について笑っている。しかし、A、B 二人だけで共通理解を確認して笑ってしまったため、その場に居合わせた外国人 C を疎外してしまった。そのため、その内容を説明して、B を仲間に取り込もうとしている。

通常談話は参加者が発話の順を交互に取り、複数の参加者が同時に発話することは破格と見なされ、同時発話が行われそうになった場合は、互いに順を譲り合う。しかし、「笑い」の場合、同時発話が許容される。

B: バランスをとるための「笑い」= 緊張緩和

自己の領域にある恥ずかしいこと、プライバシーに属することを開陳

する際に笑うことがある。また自己の領域から相手に意見、要求を出していく際にも笑う。挨拶、謝罪などにもこの「笑い」を伴う。これらは一見A仲間づくりの「笑い」に似ているが、意図的にA仲間づくりの「笑い」に擬して、疑似仲間を作る社会的色彩の強い「笑い」である。

B-1: 自分の領域に属する内容に付加された「笑い」= 恥または照れによる「笑い」

自己の領域に属することがらでも、表明することに抵抗のあることに「笑い」を付加する。

<例 10>

- 1 A 結局、あの一、やっぱり年ですね。ぼけちゃってね。だめなんですよ。<笑い>
- 2 B ねえ、先生が年だなんておっしゃったらねえ。
- 3 複数話者 <笑い・複>

会話例 10 では発話者Aが自分の年老いたこと（恥ずかしいこと）^(注5)を「笑い」とともに開陳している。ここに「笑い」がなかったとすると、深刻な場面になるが「笑い」によって場面の深刻化を防いでいる。つまり事実の深刻さを笑うことによって緩和し、バランスをとろうとしている。バランスをとるばかりか「笑う」ことにより自分に事実を笑い飛ばす余裕があると表示して、会話に参加しているとも考えられる。つまり、「楽しいこと」として、擬似的にA-1の「笑い」として考えると考えられる。実際会話例 10 においてAの発話はBによって否定され、その場に居合わせた複数の話者がA-2の「笑い」によってそれに同調することで終わっている。

会話例 12 は年齢を尋ねられたBが照れて笑っている場面であるが、これも自分のプライバシーを他人に開示するために、照れて笑っていると考えられる。

<例 12>

-1 A Bちゃん、まだ 22 歳だっけ。

-2 B 来年で<笑い>、23 で一す。<笑い>

テレビの街頭インタビューに答える市民が意味なく笑ったりしているのもこの種の<笑い>であると考えられる。不特定多数の他者に自己の領域を開陳する照れが緊張を強いて、その緩和作用としての「笑い」を引き起こしている。換言すれば自分の領域の奥にある個人的なものを領域の外に引っぱり出すために生じたプレッシャー、負荷を何とか押し戻してバランスをとり、バリアーを開けて、会話に加わるために「笑い」が使用されたと考えられる。

この「笑い」は自己の領域にあることを開示する点においては A-1 の「笑い」と非常によく似ていて判別しにくい。話者も意図的に A-1 の「笑い」に擬することを狙って操作している。会話例 8 のように、実は「恥ずかしい」ことなのに「楽しい」こととして、笑い飛ばしているとも考えられる。しかしながら発話内容が楽しいことではない点、しかも自己の領域内の奥に存在するプライバシーの部分である点から B-1 に分類した。

B-2: 相手領域に踏み込むことに付加された「笑い」=厚かましきによる「笑い」

話者が相手に対する意見、命令、要求、依頼、提案を行うことがある。これは自分のプライベートなことではなく聞き手、つまり相手領域に属することである。その場合、話者は自分が相手領域に入り込み、相手のプライバシーに抵触する意見を言うこと、相手の判断を促すこと、相手の行動を促すこと等による緊張、厚かましき認識を和らげる、緩和するために笑う。

会話例 13 は、職員室での教員同士の会話である。教師 A が同僚の教師に学生に教室内の机を下げない（動かさない）ように伝えてほしいと要求する場面であるが、A が相手に要求する行為を厚かましき、恥ずかしいと認

識し、それを和らげるために「笑い」が用いられている。または自己の要求に予想される抵抗の負荷を少なくするために笑っていると考えられる。

<例 13>

- 1 A でも間違えて机下げちゃったりなんかすると大変ですよ。
<笑いながら>なぜかとゆくと、月曜日の1時間目、わたしの授業なの。<笑い>だから下げないように、戻すように言っといてください。<笑い>

会話例 14 は、職員室に来た言い方のはっきりしない学生に対する教師の命令発話であるが、内容の厳しさを和らげるために笑っている。基本的には相手領域に属することを云々する行為に「笑い」を用いてその内容を和らげていると考えられる。

<例 14>

- 1 A はっきり、はっきり思っていることをいう。<笑い>

例 15 のようにものごとに対する批判的なコメントにもこの種の「笑い」が伴うことが多い。

<例 15>

- 1 A ちっと高いでしょ。
-2 B たーかーいですよ。<笑い>

例 16 のように提案表現とともに現れることも多い。

<例 16>

- 1 A じゃあ、この、点減ってゆうふうにごー、ファジーな表現がいいんじゃないですか。<笑いながら>

以上のようにB-2の「笑い」は要求表現、命令表現、コメントの表現、提案の表現等とともに現れ、内容の厚かましき、厳しさを緩和する働きをする。それは基本的に相手領域に属することを自分の意見として云々する厚かましき、相手領域に入り込む緊張を緩和する意図が働いていると考えられるが、それとともに自分に敵対関係にある者を作らないようにしよう

とする自己防御の心理が働いていると考えられる。または相手領域に属することを述べることにより結果的には自己を開陳している自分自身への認識、つまり B-1 の「笑い」に通じる認識が B-2 の「笑い」を喚起しているとも考えられる。

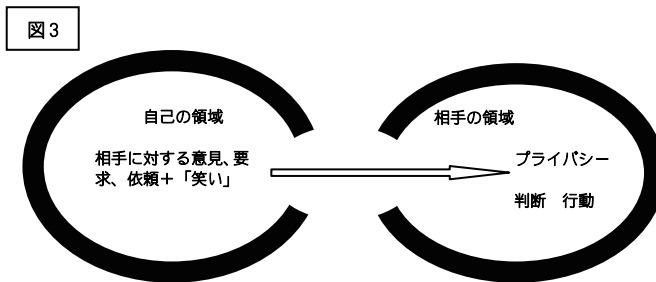
会話例 17 は相手にドーナツをさしだしながらの発話である。

<例 17>

A みんなで食べてください。<笑い>

これは相手にもものを受け取ることの負担を与えたくない気持ちが<笑い>となって現れたのと思われる。またはドーナツを持ってくる自分自身への自意識、恥ずかしさが「笑い」となったもの、つまり A-1 の「笑い」とも考えられる。

以下関係を図示する。



B-3: 挨拶に付加された「笑い」=儀礼的「笑い」

この「笑い」は前述の A : 仲間作りの「笑い」に似ているが、これは A の「笑い」の基になる親しさ、楽しさを必ずしも共有する必要がない点が異なる。もともと仲間でない相手を「擬似仲間」として関係づけることもできる「笑い」である。

<例 1 >

A あーそうですか。有り難うございます。<笑いながら>

こんにちは、さようなら等の挨拶表現、ありがとう、どうも等の謝礼表現、すみません、ごめんなさい、どうも等の謝罪表現とともに起こる「笑い」である。これらの「笑い」は発声を伴う場合、発声を伴わないほほえみの場合をも含めるとかなりの高率で前述の表現と起こる場合が多く、笑わない場合が例外的である。互いの領域に入り込む親しさが共有されていなくても、互いの領域にそれほど深く入り込まなくても、義務的、儀礼的に出現する「笑い」である。

今回のデータには謝罪表現の「ごめんなさい」「すみません」とともに出現する「笑い」が多く観察された。この場合、話者は自分の領域に属する失敗を認め、恥じるとともにその事実を「笑い」によって軽くし、自分を仲間として位置づけることにより、相手が自分の過ちを責めることを回避し、なおかつ相手との良い協調関係を作りたいと考えている。破綻しそうな人間関係を修復するために、笑うものであり、ご機嫌を取り結ぶための「笑い」、自分の過ちに対するいいわけとともに出る「笑い」、営業用の「笑い」の場合が多い。笑われてしまっでごまかされて強く相手を責められなかったということになる。今回はあまり親しくない相手、または対立関係に陥った相手との緊張関係を緩和しようとしたバランスをとる目的の「笑い」と考えここに分類した。

C: 覆い隠すための「笑い」= 会話継続

言いたくない、またはうまく言語化できないとき、とりあえず笑うことがある。これにより、発話者は意見を表明せず、つまり自己開示しないが、会話は継続する。話題終了時のマーカ―として現れる「笑い」もこの種のものであり、この「笑い」が繰り返され、会話は終了する。

C-1: 言いたくないことを隠すための「笑い」= ごまかしの「笑い」

はっきり言いたくない内容を笑ってごまかして表現しない場合がある。
<例 18> (職員会議で)

- 1 A あと進路ニュース（間）は一、ほんとはもうちょっと違うこと書こうと思ったんですけどスペースの問題とかいろいろあって一、きょうは一、この内容で一、＜笑い＞、とゆうぐらいで一、また継続して出して行きます。

<例 19>

- 1 A あるんですよ。いろいろと。
-2 B はあ
-3 A <笑いながら>いろいろと・・・

会話例 18 では「きょうはこの内容で（我慢して/勘弁してください）」というところを「笑い」で代用している。会話例 16 ではあることを言いたくないのだが沈黙してしまうと自己の領域を閉じてしまうことになるため、とりあえず非言語的表現である「笑い」が選ばれた。もし会話例 19-3 に「笑い」がなかった場合、相手に適切な説明を与えないで相手を自己の領域から疎外することになる。敵意がないことを示すために「笑い」を使ったと考えられる。この「笑い」は言いさし表現とともに現れることが多い。

C-2: 反応の仕方がわからないための「笑い」=とりあえずの「笑い」

言いたくない内容をごまかすためではないがどう反応していいかわからず、とりあえず反応しておこうという場合にも「笑い」が使われる。

<例 20>

- 1 A だからそれがすけてんのよ。
-2 B <笑い>
-3 A もう、パンツ見える？
-4 B 見えてるね。
-5 A こおんな、いいよ、もうここだけだから。
-6 B はは。<笑い>
-7 A 出るときスカートはくからさ。
<間 7 秒>

- 8 B ともかくあれをやっちまわないと、うんん。<咳ばらい>
<間 28 秒>

例 20 はAがBに自分のスカートが透けてパンツが見えるかどうかと聞いている場面であるが、Bは話題に積極的に参加するわけでもないし、参加を拒否しているわけでもない。しかし協調的フィラーとして「聞いています。あなたとコミュニケーションのチャンネルを切ることによりあなたと敵対関係になりたくない」というメッセージを出している。

この「笑い」はA-2：共有表明の「笑い」と似ているが、相手の領域に入り込まないで、つまり相手の話題を積極的に共有せず、ただ会話を維持している点が異なる。一見A-2：共有表明に見える「笑い」も同意発話を伴わない場合は実はC-2の「笑い」である場合がある。

このC類に分類される「笑い」の表現意図である発話回避というものは非言語行動と言語行動の中間に位置する「笑い」の基本的な特徴を表している。まさに発言しないこと、覆い隠すことで、人はその「笑い」の解釈を相手に任せ、様々な言語ゲームを行っていると考えられる。

会話例 20 ではBの話題に対する積極的な同意がないため、話題が終了し、次の話題に移っている。^(注6)

3 まとめ

基本的に対人間のコミュニケーションにおいて、自己開示を行う場合、自己の領域にあるものが境界を抜けて、場面に出る。または他者の境界をも抜けて、他者の領域にまで入り込む。そのときに境界を認識し、それを速やかに突き抜けるために「笑い」が出現すると考えられる。しかしながらすべての自己開示に「笑い」が伴うとは限らず、その根底には齟齬、ミスマッチの認識、及び、個々のフィールドにおける、境界の認識の差があると考えられる。

「笑い」の対人行為上の機能としては種々のものが考えられるが、基本的には A：仲間づくり、B：バランスをとる、C：覆い隠すことであった。

しかし、笑いは、聞き手の解釈によって、その対人機能は異なって解釈され、その境界もファジーな融合体であると考えられる。場面ごとに、相互的に「笑い」のある機能が活性化されると考える。

今回のデータでは、談話展開上の機能としては基本的には一致し、協調的に談話を展開するものであった^(注7)。つまり、「笑い」によって、人は協調的に物事を進め、同一領域内にいること、仲間であることを確認し合う。または仲間であることを装って、協調的に物事を進めると考えられる。以下A, B, C 3種の「笑い」を表に分類した。

表1 A：仲間づくりの「笑い」

		発話内容	対人関係における原因	談話展開上の機能	相手の「笑い」の望ましさ
		+協調方向	仲間意識	緩和促進	受け入れ表明
自己の領域	A-1：共有期待の「笑い」	自分が楽しいと思うこと	話題の共有を期待する仲間意識	場面盛り上げへの誘い	望ましい
相手の領域	A-2：共有表明の「笑い」	相手が楽しいと思うこと	話題を共有する仲間意識	場面盛り上げへの応答・同意	
両者の領域	A-3：共通認識確認の「笑い」	両者が知っていること	共通意識の確認する仲間意識	場面盛り上げ・共通認識確認	望ましい

相互行為としての「笑い」－自・他の領域に注目して－

表2 B：バランスの「笑い」

		発話内容	対人関係における原因	効果	相手の「笑い」の望ましさ
		－協調方向	緊張	緊張緩和	同意・受け入れ表明
自己の領域	B-1：恥・照れによる「笑い」	自分の恥・プライバシーだ と思うこと	相手に対する自己開示による照れ	恥ずかしさ 少	望ましくない
	B-2：厚かまし しさによる「笑い」	相手に対する 意見・提案・ 要求・批判	相手領域に入り、自己開示する、相手のプライバシー、判断、行動に言及する 厚かましさの認識	厚かまし 少	
相手の領域	B-3：儀礼的「笑い」	相手に対する 感謝・謝罪・ 挨拶	社会的関係の認識	関係づくり	望ましい

表3 C：覆い隠すための「笑い」

		発話内容	対人関係における原因	効果	相手の「笑い」の望ましさ
		協調方向	自己開示回避	会話の継続 談話参加の保持	同意・受け入れ表明
自己の領域	C-1：ごまかしの「笑い」	発話したくないこと	発言回避	会話の継続	望ましくない
	C-2：とりあ えずの「笑い」	不明確なこと	発言保	会話の継続	望ましくない

- (注 1) 用例は作例とあるもの以外はすべてデータから採択したものである。
- (注 2) 「笑い」の範疇に今回は「微笑」を入れなかった。その理由としてはまず第 1 にデータそのものが「微笑」を採録していないことによる。第 2 に水川 (1993) に “It can be demonstrated that there are many discoveries to be made studying vocal data alone.” とあるように、まず第 1 段階として発声を伴う「笑い」を分析し、今後、「笑い」の認定をも含め、研究課題としていきたい。
- (注 3) ★、→←は重なりを表す。
- (注 4) 〈笑い・複〉は複数話者による笑いを表す。
- (注 5) この場合 A が尽日「年老いたこと」を恥ずかしく思っているかは定かではない。筆者 (早川) の推察と談話参加者の反応 (-2, -3) により決定した。
- (注 6) 水川 (1993) にトピック転換と「笑い」の関係は詳しい。
- (注 7) 今回は、データ内にないため、対人機能のない「一人笑い」の類、非協調的に談話を展開する「あざ笑い」「嘲笑」といったものは云々されなかったが、基本的に、協調性を除けば、齟齬、自己開示性という点で、一致し、この枠組み内に組み入れられる。

参考文献

- Jefferson, G., Sacks, H. and Schegloff, E. (1987) Notes on laughter in the pursuit of intimacy. In G. Button and J. R. E. Lee (eds.) *Talk and Social Organization*. Glededin: Multilingual Matters, pp. 152-205.
- Ekman, P (1992) *Telling lies*. New York W. W. Norton
- メイナード 泉子 (1993) *会話分析* くろしお出版
- 水川良文 (1993) 「自然言語におけるトピック転換と笑い」『ソシオロゴス』17: 79-91
- 海保博之、原田悦子 (1993) 『プロトコル分析入門』光明社
- 野村雅一 (1994) 「変容する笑いの文化」『言語』Vol. 23・No12, 大修館書店
- 橋元良明 (1994) 「笑いのコミュニケーション」『言語』Vol. 23・No12, 大修館
- 早川治子 (1994) 「日本人の「笑い」の談話機能」『言語と文化』第 7 号文教大学言語文化研究所
- (1997) 「日本人の「笑い」の談話展開機能 2 — 出現率と場面」『言語と文化』第 8 号文教大学言語文化研究所
- (1997) 「笑いの意図と談話展開機能」『女性のことば・職場編』現代日本語研究会編、ひつじ書房
- (1999) 「自然言語データにおける「笑い」の数量的基礎分析」『言語と文化』第 12 号文教大学言語文化研究所
- Heritage, J., (1985) “Analyzing News Interviews: aspects of the production of talk for an ‘overhearing’ audience” in T. vanDijk(ed.), *Handbook of Discourse Analysis*, vol. III: *Discourse and Dialogue*, Academic Press.

相互行為としての「笑い」－自・他の領域に注目して－

Sacks, Harvey (1992) Lectures on Conversation, Blackwell

Stubbs, Michael (1983) Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural language, Basil Blackwell

谷 泰 (1987) 「会話の中の笑い」 谷泰編『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所

山口昌男 (1990) 『笑いと逸脱』ちくま文庫 筑摩書房